ダスト光学特性の基づく 原始惑星系円盤の観測解釈

田崎 亮 (東北大学)

基研研究会「原始惑星系円盤」 2017年7月11日-13日 京都大学 基礎物理学研究所



- ・ダスト (µm) から 微惑星 (~1...10 km)の成長過程は未解明
 - ダストの落下問題
 - 衝突破壊問題
 - 跳ね返りの問題 などなど
- ・微惑星への成長モードは?
 - ・直接合体成長? (porous growth?)
 - ・不安定性?

観測的に円盤中のダスト成長に対して制約を与える ことは、微惑星形成過程を理解する上で重要

Observation of protoplanetary disks





観測量(Intensity)からダスト光学特性:逆問題

アウトライン

第1部:赤外線の散乱と偏光 第2部:ミリ波の吸収と散乱 第3部:ミリ波偏光

第1部:赤外線の散乱と偏光



☑ ダストのopacity (cm² per gram of dust) (屈折率の波長依存性を無視)





☑ ダストのopacity (cm² per gram of dust) (屈折率の波長依存性を無視)



円盤散乱光の明るさは?



ダスト半径が波長より大きい時 (x>>1),



ω_{disk}~βω~0.1×0.5~0.05 (at r=100 au, flare up) 非常に単純には、円盤由来の散乱光の明るさは、 中心星の光の数% - 10%程度と見積もられる

Red & Faint disk problem Mulders et al. 2013

☑ HD 100546からの散乱光は暗く(アルベド<~ 0.01), 赤い!





☑ 暗く,赤い散乱光はx>1のダストで説明可 前方散乱は正味の散乱にはならない



散乱を考える際は, phase functionも重要!



HD 100546表層のダスト

☑ VLT/SPHEREの観測を元にphase function

VLT/SPHERE Polarized Intensity (Garufi et al. 2016)

Flaring geometry mapping (Stolker et al. 2016)



H_{τ=1}~1.9 H_p (at 100 au) に数μmサイズのダストが存在 (Stolker+16) \checkmark ☑ コンパクトダストが巻き上がると思うと、乱流強度α>0.2 (Mulders+13) → Aerodynamic supportで表層まで巻き上がったfluffy aggregate?

Further constraints? \rightarrow Polarization!

Scattering polarization (single size): Mie理論 散乱角, サイズパラメータ(x), 複素屈折率(m)によって変化

- ・x<<1: Rayleigh散乱 (散乱角90度で完全偏光)
- ・x~1:多重散乱&干渉による複雑な偏光パターン
- x>>1: Brewster角で完全偏光(幾何光学極限)



Scattering polarization: Distribution of Spheres

□ 一様球サイズ分布で平均 n(a)da ∝ a^qda a_{min} = 0.001 µm q = 3.5
 □ x|m-1| > 1で**多重散乱**が効き始め, **急速に偏光度は下がる** (not x > 1 !)
 注) 幾何光学域(x>1)でも粒子が透明(|m-1|<<1)であれば,

一回散乱が良い近似→一回散乱の場合は,高い偏光度!



Scattering polarization: Porous dust aggregate

fluffy aggregate (df=1.9) X ~ 23, P(θ=90°) ~ 80% RT et al. 2016

compact aggregate (df~3) X ~ 45, P(θ=90°) ~ 40% Min et al. 2016





<u>Porous aggregates (X>>1)の偏光特性</u>

- ・密度一様球よりも高い偏光度
- ・空隙が大きいほど、高い偏光度
- Bell-shaped profile

Radiative transfer with porous dust aggregates

GG Tau Circumbinary disk:

☑ 前方散乱と高い偏光度が共存
 ☑ 低密度アグリゲイトで再現可能!





RT et al. in prep.

Radiative transfer with porous dust aggregates

- ✓ Negative Polarization Branch (NPB)による偏光ベクトルの反転
 - Compact aggregatesはしばしば後方散乱域で偏光度が負になる
 - ← 後方散乱の際, P<0のモードが選択的に干渉して強められる
 (Weak localization effect; Mishchenko et al. 2009)
 - ・NPBは彗星や小惑星表面のダストで実際に観測されている



第2部:ミリ波の吸収と散乱



☑ ダストのopacity (cm² per gram of dust) (屈折率の波長依存性を無視)





☑ ダストのopacity (cm² per gram of dust) (屈折率の波長依存性を無視)



ダストによるミリ波吸収の物理

- \square βs := β in Rayleigh limit (x<<1)
 - (a) <u>結晶質の絶縁体</u>(結晶質silicate/H₂O iceなど)

赤外線の振動共鳴のdamping wingによる吸収 (Lorentz model)

(b) <u>導体/半導体</u> (graphiteなど)

自由電子によるエネルギー散逸 (Drude model)

(c) <u>非晶質の絶縁体</u>(非晶質silicate/H₂O iceなど)

モデル化は発展途上,主に室内実験で調べられている (e.g., Coupeaud+12')

- 性質)・結晶質よりも大きな吸収係数
 - ・<u>温度依存性</u>がある

非晶質ダストによる吸収モデル: see e.g., Meny et al. 2007

- ☑ 星間ダスト (a_{max}~0.1µm << mm波)
 - 分子ガスが卓越するline of sightでβ=1.66

(Planck Collaboration Int. XIV, 2014, A&A, 564, A45)







円盤でのOpacity index β

 $\alpha = 2 + \beta$



Testi et al. 2014

ダストの成長とopacity進化 (compact grain)



Draine (2006): amax >> 3mm, n(a)da ∝ a^{-q}da (3 < q < 4) β(λ=1mm)~(q-3)βs (βs: Rayleigh極限でのopacity index) βs ~ 1.7 (ISM-value), q=3.5の時, β(λ=1mm) ~ 0.9

β~1の粒子の正体:compact vs porous

- mass-to-area ratioが一定 (fractal dim.=2)

→ a*f=constで吸収opacityは縮退

(f:volume filling factor) 例) af=1mmの場合

> f=1 (compact), a = 1 mmf=10⁻⁴ (fluffy), a = 10 m

熱放射の性質では区別できない!

散乱は縮退しない! (RT et al. 2017) **散乱の場合, 集合したモノマー同士が干渉**→ af=constの縮退は発生しない

縮退を解く鍵は散乱にあり?





Kataoka et al. 2014

ミリ波散乱を用いたダストサイズ測定

Kataoka et al. 2015

- ・x > 1 (ダスト半径 > 波長/2π)でアルベドωが上がる
- ・x >~1 偏光度Pが急速に下がる (コンパクトダストの性質)

Pω (~偏光強度) は x~1でpeakを持つ関数

観測波長λobsで偏波が受かれば、 amax ~ λobs/2π

(Porous aggregateの場合, サイズの下限値がわかる: $a_{max} > \lambda_{obs}/2\pi$)



第3部:ミリ波偏光







ダスト整列による円盤ミリ波偏光

Bertrang et al. 2016 (トロイダル磁場整列を仮定)



RT,Lazarian & Nomura 2017 (整列理論と整合的に計算)



RT, Lazarian & Nomura 2017の主な主張

- 従来は磁場整列を仮定した結果、動経方向の偏光ベクトル
- (サブ)ミリ波の偏光ベクトルは輻射fluxの向きに垂直に出る
 → 方位角方向の偏光ベクトル
- ALMAで観測される偏光ベクトルは磁場とは無関係

HD 142527からの偏波 (Kataoka+2016)



- 偏光ベクトルが北側で90度flipしている → 磁場整列では困難か
- 偏光ベクトルの向きは散乱偏光と整合的 (方位角方向にflux gradientがあれば, 輻射整列でも説明可能か)
 偏波が散乱由来であるすると、ダスト半径は140 µm

HL Tauからの偏波 (Kataoka+2017) $\lambda = 1.3 \text{ mm}$ $\lambda = 3.1 \text{ mm}$



散乱偏光と整合的

(Inclination effectで偏光ベクトル

は円盤短軸と並行になる see, e.g., Yang et al. 2016)

輻射整列理論と整合的

円盤赤道面でのダスト半径: β vs. 散乱偏光

	a few mm (βから予測されるサイズ)	粒径 ~a few 10²µm (散乱偏光から予測されるサイズ)
HD 142527	λ=870 μmの偏光の起源は? 整列偏光?Porousダストに よる散乱?	β~1の理由は?
HL Tau	λ=1.3mmと3.1mmの偏光の 波長依存性をどう説明する か?(Porousダストの散乱で 説明するのは難しい)	β~1の理由は? 薄い円盤の起源は? Low alpha-value?

中間赤外線の偏光なら、磁場に対する整列が見える?







・ 円盤表層をトレースするMIRでの円盤偏光
 ・ ダストが磁場に対して整列する可能性あり
 (但し、磁場強度やダストの磁気感受率に依る)

 円盤表層部の磁場線の構造は、 円間赤外線(λ~10µm)の偏光撮像 で観測される可能性がある

Summary

- 円盤の赤外線撮像観測
 - ダストのサイズは散乱光の色やアルベドに現れる
 - → 強い前方散乱(大きなダスト)は円盤をより暗く・赤くする
 - ダストの内部構造(porosity)の情報は偏光度・偏光ベクトルに現れる
- 円盤ミリ波撮像観測
 - opacity slope β~1はダスト半径がmmサイズと考えられてきた
 - → 散乱opacityは無視できない可能性が高い
 - → Intensityには、ダストのアルベドの情報が含まれている可能性あり
- 円盤ミリ波偏光撮像観測
 - ミリ波偏光の起源は、散乱と輻射整列
 - 散乱偏光とopacity slopeのそれぞれで求まるダスト半径の整合性 については今後, 詳細に調べていく必要がある